まどろみの国の物語

一理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まどろみの国の物語

【Ｎコード】
Ｎ５０６５ＢＡ

【作者名】
一理

【あらすじ】
まどろみの国　夢と現実の狭間に存在する不思議な国で、それぞれに深かったり浅かったりの物語が存在する。
司は複雑怪奇で意味不明の物語を見ていきながらふと淡い恋心に気がつくが、関係ないやつに邪魔されていく。

1、プロローグ

チャイムの音は甲高い。
扉を開け閉めする動作音はうるさい。
騒がしい生徒の声は先生の一喝で静まり返る。一瞬だけ。
始まった授業は退屈な数学の授業で、黒板に書きだされていく数字は何の意味をもつのか私にはわからない。教科書を立ててこっそりお菓子を食うやつも、机の下を不自然に覗き込みながら携帯をつつくやつも、興味ない。
あくびを一つもらすと、紙屑が飛んできた。
「・・・・・」
ゴミこっちに捨ててクンなし
先頭の片隅の席だったのでちょうど斜め前にあるゴミ箱めがけ投げ捨てる。
「ねむ」
もう一回あくびをする。
ころん、とまたゴミ屑が
「・・・・・」
だれやねん。
振り返ると森馬一数だった。ちなみに最初なんていう名前か読めなかったが、もりうま　ひとかずっていうらしい。
「ちっ」
舌打ちして睨むと『頼む』のポーズでこちらに何かを求めていた。
「えーと、今日はこの一列前に出て書け」
あぁ、今日あたる日だったのか、ざまぁ
「頼むよ、あとでなんかおごるからさ」
「コンビニでエロ本」
「は！？」

「嘘だよ」
先生が早くしろっと急かす。
「頼むよ」
「仕方ないな」
黒板に書かれた問題をみる。
む、さっぱりわからん。
「答えは？」
「先生森馬が答えを聞いてきます」
「森馬ぁ」
「おまっ裏切り者！！」
どうでもいいけど、自分で解け。
休み時間、お弁当の時間。一人机の上に弁当を広げると横からすごい勢いで机をぶつけられた。睨むように見れば一年の時のみならず中高が同じという同じクラスの腐れ縁。伏見馨だった。
「何？」
「いやん夢野ちゃん怖い顔～、一緒に食べよん」
馨は男だが女のような顔のつくりなので本人もたまに女のようにふるまうことがある、友達も男より女のほうが多いし。
「苗字で呼ぶな」
「かわいいのに、夢ちゃん」
「・・・・」
「冗談怒んないで司」
男のくせに肩まである髪の毛をリボンでくくって束ねているところをみると、先生の髪の毛切れという注意をまた無視するらしい。
つかリボンって。
弁当を食べ終え机に伏す。
「寝るの？眠り姫のようによく眠るね。王子様のキスはいかが？」
「しばくぞ」
「馨ちゃん、司～相変わらず仲いいね」
「優衣もか、私の眠りを覚ますものは何人たりとも許さぬ」

「いつからファラオになったの？」
優衣はどこからか椅子を引っ張ってきて司の前に座った。
寝たいんだけど。
「ね、そんなに寝てんならさ『まどろみの国』はみたことある？」
「まどろみ？」
「そう。よくわかんないんだけど、夢と現実の間にその国があってそこに行くと願いがかなうんだってさ」
「へぇ。お休み」
「聞けよ」
うるさいな。
「司！お前よくもさっきの数学の時間」
「それ焼きそばパン？一口くれ」
「伏見の一口は一口じゃねーからいやだ」
「じゃあ私に頂戴」
うるさい頭上も無視して、眠る。
体が浮遊する感覚。
暗闇のはずの視界の隅から白い丸い何かがぴょこぴょこはねてやってきた。それはデフォルト化された羊でかわいらしく二足で立っていた。
サッと看板を見せた。
←
「・・・・」
下？
下を見た瞬間私は、落ちた。

2、まどろみのなか

お茶をすすっていると遠くから砂埃がやってきているのが見えた。
木の上で子どもはお茶をすすっている男がまたぶっ飛ぶものだと思っていたが、白い何かが高速で移動しきったころには男はすでに回避し新しく急須にお湯を入れようとしていた。
「あ」
ぐしょ、男は上から降ってきた何かによってつぶされた。
珍しいこともあるもんだとおもっていたが、そうでもなかったようだ。
「おい、これなんだ」
「これじゃなくて、こいつのがいいんだけど」
司は起き上がった。
学校で寝ていたら、なぜか外に出ている。
周りは真っ白でただ広く、大きな木が一本だけあった。
夢か、夢なのか。そうなのか。
「自分が踏んでいるものを見ろ」
王様コスプレしたＫｉｄがそういうので、下を見れば誰か踏んでいることに気が付いた。のんびりのくと男が立ち上がった。
「うわ」
思わず声がでた。
包帯ぐるぐるで肌が一切見えない。ミイラ男だった。
「なんで着てる服学ランなの」
「おや、突っ込むのはそこですか」
しかも雰囲気が今の学ランではなく明治とかに来ていた服の学ランだ。
「いや、そこは触れちゃいけない何かかなって」
「豪胆ですねぇ、結構結構。気にしませんが私がなぜ包帯まみれ

かといいますと」
すっこーん。
目の前で話していたはずの男が消えた。
「・・・・・」
子供と一緒に傍観する。
ひゅうっと弧を描くとぐしゃっと着地した。
「生きてる？」
「いつものことだ。気にしなくていいよ」
子どもはそういって大きすぎるマントを引きずって椅子に座った。
「てかさ、ここどこ。夢か、こんなリアルすぎる夢どう対処したらいいのか」
「そう、ここは夢と現実のはざまに存在するまどろみの国」
「うわ、血まみれですけど」
なんでこの人が包帯まみれなのかわかった気がする。
「まどろみの国？」
夢がかなうとかどういえば優衣が言ってたな。あぁ、なるほど
「優衣が変なこと言うから暗示的なものにかかって夢に深く出てきたんだ」
「おい、包帯。なんか夢扱いだぞ」
「夢じゃないんですけどね、現実でもないのですが」
「・・・・・・・」
包帯男は紳士的な動作で司の手をつかむと、軽く握った。
とたん、周りの真っ白な空間からカラフルな色が通り過ぎていき、白と黒と灰色の光のたまが集まってきた。それは広がり森になった。
彼は司の手をつかんだまま歩き出す。
「夢を見ていればあなたはまどろみの国の住民。でも起きているあなたは大事なお客様だ」
なんでだろう、優しい声でそう言われたから、ドキっと心臓がはねた。
「あのさ、どこいってんの」

「まどろみの国の紹介をば」

3、えんぷさ

まどろみの国。
大まかに四つの領土によって構成される。
一つは白の魔法使いが支配するストーリー・ドリーム。物語の夢と呼ばれる場所で、主に人が創造したりありえないことを夢に見たことがそのまま投影される場所。
一つは黒の魔法使いが支配するリアル・ドリーム。現実にほぼ近いところにある夢。こうなりたいあぁなりたいとう願望が強くあらわれる場所。
一つは灰色の魔法使いが支配するファンタジー・ドリーム。はかない夢が生まれては消えていく不思議な空間。
最後に誰も支配していない危険区域バッド・ドリームが存在している。
「悪い夢？」
「そんな感じです。悪夢という場所ですねぇ。領土の中にはそれぞれの物語があるのですが、それはまた今度ということで」
「あのさ、私みたいに来るのって珍しくないの？」
「そうですね」
あまりの即答になんとなく殴りたくなった。
（怒らなくても、いいのか。なんとなくいらってきた。包帯だからか）
ざぁぁぁ、テレビが砂嵐になった時と同じ音がした。
「おや、あらわれた」
「なにが？」
子供が描いたような人の形をしたものが空中でちょこんと存在していた。
「なにあれ」

「エンプサ。私どもは不気味に見えるのでブギブギって呼んでます」
「言いにくくない？」
ブギブギは枝のような腕を肉付けさせ、まっっちょになったかと思うと、次の瞬間片腕が死神のような武器に変わった。
「もしかしてバトルモードとか」
「そうですねぇ、そうなるかもしれないし。そうならないかもしれませんね」
「と、いうと？」
ブギブギが一体から増えた。
めきめきいわせながら片腕を武器に変えていく。
「ざっと１０匹ぐらい増えたけど」
「ですね」
キラ。
光が一匹のブギブギを消し去った。
「おや、きましたか」
白と黒と灰色の光が現れると、それは人になった。
「呼ばれたから来たけどさ。何してるわけ？」
「そいつはだれだ」
金髪にグリーンな瞳がきれいな若い男と長い黒髪を垂らしたモノクルの似合う男がしゃべった。
「お客様だよ」
「紹介は後にして」
一人深くフードをかぶった人は女らしい、彼女の言うとおり今は自己紹介をしている場合ではない気がする。
「ブギブギ・・ここまでくるようになったか」
黒い人がそういうと、本を飛び出し一ページを破りブギブギのほうへ投げると、紙屑が爆発した。
「うわ」
「精霊たちよ」

金髪がそういうと彼の体から虹色の光があらわれたかと思うとそれぞれ光を放ち、ブギブギを撃ち貫いた。先ほどの攻撃も彼のようだ。

俊足のスピードで近寄ってきたブギブギをフードは懐から粉のようなものを取り出し、それにぶっかけると、それの体が急に植物に侵されしなびて砂と化し、風に流れて行った。

あらかた片付いたのを見て、司はつぶやく。

「さすが夢」

目、覚まさないとね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5065ba/

まどろみの国の物語

2012年1月15日02時48分発行